
トロい女

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トロい女

【Nコード】

N3399L

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

俺の彼女は、何をするにしてもトロい。ご飯を食べるにも時間が掛かるし、掃除をしているだけで一日が終わってしまう。そんな彼女の態度を見ていると俺は苛々した。あまりにムカついたので、髪の毛を掴んで井の中に顔を埋めさせてやった事もあった。

そんなある日、俺は何で彼女と付き合ってるのか疑問に思った。

こんなに苛々としてまで同棲する必要があるのだろうかと思ひながら、そこで、付き合う必要はないという結論に達した俺は、部屋を飛び出した。

だが何故だか、俺はそのまま死んでしまう事になるのだった。

俺の彼女はトロい。

死ぬ程、トロい。

例え一緒に食事をし出したとしても、俺が完食してから2時間後に彼女が食い終わるぐらい、トロいのだ。

その間、何をしているのかと思えば、普通の人間なら気にもしない下らない事ばかりやっている。

どれから食べようかなとか。

食事中に、どう料理を並べ変えようかなとか。

お箸を使っていたと思ったら、途中からフォークに持ち替えてみるとか。

食べた肉の欠片を、モグモグと10分ぐらいかみ続けたりもする。

この上なく、トロい。

同棲している俺からすれば、早くしろよ、と言いたくなるのも分かってもらえるだろう。

行動が遅くなれば洗い物や片付けの時間が延びるだけだ。

俺の彼女は、見ていると本当に苛つく。

あー、鬱陶しい。

その日も、あまりにも苛ついていた俺は、また彼女にキレた。

僅か10枚の洗濯物を畳むのに3時間も掛けてやっていたので、いい加減にしろと、怒鳴ってやったのだ。

すると、彼女は俯いてしまった。

その反応を見て、少しは懲りたかなと思った。

いや普通なら、懲りる筈だ。

だが、それは甘い認識であった。

俺が晩飯にラーメンを作っても、食べ終わる頃には麺の太さがうどんのように伸びていたのだ。

全てが台無しである。

こっちは出汁もとって、良い麺やチャーシューをネットで探し、高い金を出して購入したというのに。

まるで苦勞が報われないではないか。

もう、バカにしていると思えない。

カッとなった俺は彼女の髪の毛をグワツと掴み取ると、汁が残っていたラーメンの器の中に顔を押し込んでやった。

そして、まるで果実を搾るようにグリグリと頭を沈めたのだ。

あー、気持ちいい。

彼女は溺れた虫のように手足をばたつかせていたが、聴て俺の手を弱々しく握っていた。

それは、まるで、

「助けてください」

「お願いします、助けてください」

と、言いたかったようである。

息が出来なくて苦しいというのに、爪を立てたり握りしめるといったマネはしなかったのだ。

その哀願で気分が良くなった俺は、ゆっくりと手を放してやった。

すると勢いよく顔を上げた彼女はゼーゼーと荒い呼吸で酸素を吸い込み、そして強ばった笑顔を無理やり作っていたのだった。

流石に、これで懲りただろう。

そう俺も考えた。

だが、またもや期待は裏切られてしまったのである。

次の日、風呂の掃除を言い出して、半日も風呂場に籠もっていたのだ。

カツとした俺は怒鳴り込み、一番温度を高くした熱湯のシャワーを、彼女の全身に浴びせ続けてやったのである。

泣き叫ぶ悲鳴を聞き続け、俺はやっと落ち着く事ができたのだった。

俺の彼女は、本当にトロい。

此奴と一緒にいて苛つかない奴が要るのなら、会ってみたいものだ。

ある日、俺は一人で憤慨していた。

彼女は買い物に出かけてしまったので、部屋の中に座り込んでムカムカとしていた。

だが怒りというものは、数時間もしてしまえば極端に冷めてしまうものだ。

そして一旦、冷静になった俺は、ある事に気が付いていたのだ。

そういえば、何で俺達は付き合っているのだろうか、と。

こんな苛ついたり怒ったりしているというのに、なんで無理をしてまで一緒にいるのだろうか、と。

イヤな気分になると分かっていて、同棲する必要があるのだろうか、と。

無い。

そんな理由などある筈も無い。

彼女の事が胸くそ悪いのなら、とつとと別れるべきである。

いや、別れた方がお互いのためだろ。

そう思い立った俺は、スッと立ち上がった。

もう彼女との思い出がある部屋に居たくなかった。

そして俺は荷造りもそこそこにして、同棲していた部屋を一步飛び出したのだ。

そうだ。

始めから、こうすれば良かったのである。

始めから。

始め。

いや、待てよ。

始め、って、何だ。

俺と彼女が付き合いだした時の事か。

それとも、同棲し出した時の事か。

あれ。

そもそも、どうやって付き合い出したんだっけ。

いや、その前に、何時、知り合っただっけ。

そう部屋から飛び出した俺は暫し考え込むも、やがて意識がうっすらと揺らいできていた。

そして膝から崩れ落ちそうになるも、なんとか壁にもたれ掛かって耐えたのだった。

あれ。

どういふことなんだ。

これは、何なん——

そこで俺の意識は完全に消え、二度と目覚める事はなかったのである。

数日後。

紺色の作業着を着て工具を持った男性が、彼女の部屋を尋ねてきた。

「すみません。今日、お伺いする予定だった佐藤という者ですが」

「あー、はい、よろしくお願いしますー」

「はい、それでは早速、ご相談にありました商品を見たいのですが」

「ああ、こつちですー」

「はいはい、なるほど」

「お手数を掛けますねえ。でも、私は何にもしてないのに壊れちゃったんですよ。酷いと思いませんかー」

「いやいや、お嬢さん。機械って物は、壊さないと壊れないんですよ。自動的に壊れる機能を付けてる企業なんてありませんからね」

「ええー、そうなんですかー。でも、私は何もしてませんよー」

「私達に修理を依頼する人は、皆そう言うんですよ。でも、大抵原因はお客さんにありましてね」

「そうなんですかねえー」

佐藤は喋りながらも、商品の部品チェックを済ませた。

「んー、お嬢さん、これはもう修理するよりも新しい奴を買った方が安いですよ」

「ええー、そうなんですかー。結構、愛着持ってたのに残念だなー」

「っていうかね、お嬢さん。どんな使い方をすれば、恋人ロボットがここまで壊れるんですかね。もうBIOSからメチャクチャになつてますよ」

「あははは。私ってロボットも満足に使えない、トロい女、なんですよー」

(後書き)

オチたような、オチてないような。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3399/>

トロい女

2010年10月21日23時50分発行